

## 子どもの豊かな気づきや感じとりを育む国語科の指導

### 1 はじめに

#### (1) 国語科の学習で考えていること

養護学級中学年の国語科の学習を進めていく中で考えていることは、授業の中で児童がいろいろなことを話したり、書いたりすることを、指導者がしっかりと聞いたり、受けとめたりして児童にかえしていくことである。児童は、日々生活をしていく中で、いろいろなことを体験して、何かに気づき、そのことについて感じ、それを誰かに伝えようとして、ことばや文字、あるいは身ぶり等で表現していくのである。それは授業という形態をとる以前に、児童の生活全般にわたって行われることであるが、そのことと授業でのことばの指導は密接に関係している。

#### (2) 「ことば」を育てる

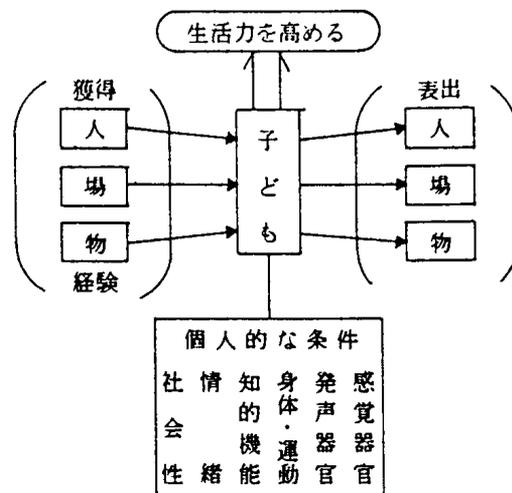
児童は、「ことば」を獲得したり、発達したりしていく中で、生活の中に広がりや深みをもつことができる。この「ことば」の機能面を具体的にとらえてみると次のようになる。(注1)

- ・人と人との意思の伝達の手段である。
- ・科学的に物事を思考し、理解し、推理、創造する道具である。
- ・物事を判断したり、行動を規制して社会生活に適応する道具である。
- ・経験の量を増し、生活をより豊かにする手段である。

学校生活の中で、児童の様子を見てみると、誰かに何かを伝えたいときに、そのことを活性化させる条件があると考えられる。それは以下のように表すことができる。(注2)

- 児童の周囲に親和的な「人」の存在があること
- 快適で豊富な自己体験を得ることができる「場」があること
- 実感したり、操作したりすることによりイメージをひろげたり、話す意欲を引き出す道具としての「物」があること

これらの3つの条件を備えていくことが、児童が「ことば」を獲得し、広げ深まることのできることでありと考える。またこのことは授業中だけにとどまらず、学校生活や、家庭でもあてはまることであるといえる。このことを養護学級の「生活力のある児童」に照らして構造図的に表したのが次の図である。(注3)



## 2 実践事例「たのしかったこと」

### (1) 単元について

児童は、日々生活する中でいろいろなことを経験する。そのなかに「ああ、おもしろかった。」とか、「ああ、たのしかった。」という経験が多くあり、児童がそれらについて言動化していくことは、児童のことばをより豊かに表現するようになるといえる。また、日常指導者が児童の活動を認め、言語化することは、表現意欲を高め、ことばや文字に対して興味や関心をより深めていくと考える。学校行事や、学級での行事等で児童がいきいきと活動している場面を取り上げ、そのことを文によって表現することで、児童の生きたことばを引き出すことをねらい本単元を設定した。児童が活動についてのイメージをもちやすくするため、写真やVTRを提示することで、感じたことを引き出すようにした。

また、本単元の「パーティーのこと」では、児童が、指導者ではなく、家族の人に「伝えたい、知らせたい。」という気持ちをもつよう、クッキーパーティーで作ったクッキーをおうちに持って帰り、家族の人に召し上がっていただいた上で、その作り方や、買い物のことなどを、児童の興味・関心に沿って質問していく手紙を書いてもらった。そのうえで、児童がその手紙の返事を書くという設定の下で授業を行えば、気づきや感じとりを交えた文章で表現することができるのではないかと考えた。

### (2) 本実験における「めあて追究」について

児童は、学習していく中で気づき、感じとり、表現していくのであるが、学習が進んでいくときに、児童個々の課題に対する見通しがあるということが、めあてをもつことにつながっていると考えられる。児童の学習ステップとめあてに関してのつながりを示したものが次表である。

学習のステップとめあて追究

	学習のステップ	見 通 し	め あ て	支援の方法
気づく  感じる  表現する	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の好きなことに集中している。</li> <li>一人で遊ぶことが多い。</li> <li>友だちや指導者の言葉に注意を向ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○具体的な指導者の指示があればわかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の要求を相手に伝えることができるようにしよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の興味をひく活動を用意する。</li> <li>児童が話していることを指導者が仲介者となって他の児童に伝える。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の要求を指導者に一方的に伝えようとする。</li> <li>指導者や友だちが活動している様子を模倣して行おうとする。</li> <li>活動の中で楽しいことを表情や身ぶりで指導者に伝えようとする。</li> <li>活動の中で印象的だった教材や器具を手がかりにして伝えようとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○具体物やVTRがあればわかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友だちと一緒に話したり書いたりしよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「○○君（さん）は～しているね。」というふうにして他の児童の行動を言語化していく。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動の中で印象的なことを身近な人物に伝える。</li> <li>(一語文、二語文を主とした会話)</li> <li>活動の中で印象的だったことを自分の感情を交えて伝える。</li> <li>(形容詞、形容動詞)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ことばかけがあればわかる。</li> <li>○活動の部分的な個所を提示すればわかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が楽しかったことを、ことばや文字にしよう。</li> <li>どんなことをしたか話したり書いたりしよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の表情や身ぶりを正確に意味づけていきながら、賞賛していく。</li> <li>日常的に親しんでいる器具や具体物を使用する。</li> <li>指導者が良き聞き役となって、児童が話したいことを聞き出すことができるよう言葉かけや賞賛をする。</li> <li>印象的な部分についてVTRや写真を使用し、言語化・文字化の手助けとする。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>一緒に活動した友だちや指導者のことを自分の活動と重ねて伝える。</li> <li>(「～と一緒に○をしたよ。○○だったよ。」等)</li> <li>活動を時間の経過に沿って順序立てて伝える。</li> <li>(いつ、どこで、だれが、だれと、なにをした等)</li> <li>活動の中で友だちと共感し合えたことを互いに伝え合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○活動全体の流れがわかる。</li> <li>○自分から主体的に活動することができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>先生や周りの友だちのことを話したり書いたりしよう。</li> <li>楽しかったことを友だちや先生のことを含めて話し合おう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の気持ちを伝える場を多く設定し楽しく伝えることができる雰囲気作りをする。</li> <li>活動の中で自然に友だちとかかわり合う場を設定していく。</li> <li>活動の流れをわかりやすくするための事前のワークシートや写真カードを準備する。また、実際の場面で活動をしつかりと言語化しておく。</li> <li>友だちとかかわり合い</li> </ul>



第Ⅲ章 豊かな感性を育む授業実践

(7) 目標行動

	目 標 行 動	指 導 者 の 支 援	児 童
話 す 書 く	VTRを見ながら、友だちや自分のことをことばで表現できる。	VTRでの活動をその都度言語化していく。	⑨⑩
	「〇が、～している。」「〇が、どうだ。」という形で表現できる。	友だちの行動を「〇君が～しているね。」というような基本的なモデルを示す。	⑦⑪⑫
	4W1Hや、発音に注意して話すことができる。	本人の発音をしっかりと聞き文字化している部分に注意を向けるようにする。	⑧
	自分が話した文字を弁別し、それをなぞることができる。	表現したものを板書等に残しておき、写真カードと対応させる。	⑦⑨ ⑪⑫
	板書を手がかりにして自分の話したことを文章で表現できる。	表現したものを板書して確認するようことばかけをする。	⑧
	文型を手がかりにして「誰が何をどうした。」という文章を書くことができる。	文型のカードを用意し、本人の活動と対応させる。	⑩

(8) 学習の展開

学習過程	予想される活動	指 導・支 援 活 動	
		全 体	個 別
1 はじめのあいさつをする。		1・学習の姿勢づくりとして毎時間行う。	1・あいさつは当番児童児⑧の役とする。
2 クッキーパーティーのVTRを見ながら発表する。	2・それぞれに自分がしたことを話すであろう。(児⑦⑧⑨⑪⑫) ・興味深くVTRを見るであろう。(児⑩) ・他の児童が話している途中でも話し続けられると思われる。(児⑪) ・単文で表現すると思われる児童(児⑨⑫) ・聞き取りと文字が一致しないことがあると思われる。(児⑧)	2・後に文章化を容易にするため、児童が話したことを挿し絵や文章で板書しておく。 ・児童が表現したことを指導者がその都度確かめていき、次への表現がしやすいようにことばかけをしていく。 ・児童が発表したことを個別にはっきりとさせるため写真カードを利用する。	2・児⑩には、VTRの中で活動していることを言語化して必要であれば文型を示しておく。 ・児⑪には、話していることをしっかりと認めていきつつ、他の児童が発表していることに気づかせるようことばかけをする。 ・児⑨⑫には、指導者が質問をしていき、できるだけたくさんの表現を引き出すようにする。
3 発表したことを文章にする。	3・板書を見て視写するであろう。(児⑧) ・文型を手がかりにして文章を作るだろう。(児⑩) ・なぞりにより文章を作るだろう。(児⑦⑨⑪⑫) ・筆先をよく見ないとと思われる。(児⑦⑪)	3・それぞれの児童の実態に応じた書き方で指導する。 ・何について書いているのかを明らかにするため、表題をつけ必要があれば写真を提示する。 ・書いている途中で新たに表現する児童がいればそれを認め書き加えるよう促す。	・児⑧には、自分の発音と指導者の板書が一致しているかに注意を向けるようにする。 ・児⑧には、自分で表現した文章を確認しながら書くようにする。 ・児⑩には、「～が～で～を～しました。」というカードを用意する。 ・児⑦⑨⑪⑫には、板書等を参考にしてマーカーで文章を書いておく。その際書ける文字は除いておく。 ・児⑪⑫には、よく見て書くようことばかけをする。
4 みんなの前で発表する。	4・自分の書いたものを見せたがるであろう。(児⑦⑧⑨⑪⑫) ・発表する際ことばが不明瞭になると思われる。(児⑧⑨⑩)	4・児童の書いたものについて、感じ方や気持ちを表れている部分に指導者も共感し賞賛する。	4・早く発表したい児童(児⑪⑫)に関しては順番を明確にしていく。 ・児⑧⑨⑩には、本人が話していることをしっかりと聞き取り、必要があれば援助する。
5 おわりのあいさつをする。	5 学習のおわりとして毎時間行う。		5・あいさつは当番児童児⑧の役とする。

### 3 考察

#### (1) 児童が伝えたいという気持ちを十分に喚起させるものであったか。

この授業では、家族が学校でのクッキーの作り方や買ったお店を知らないということを利用して、伝えたい気持ちを喚起させようというものであった。

ただ、日々顔を合わせている家族の人に、このことは児童がそれぞれいくらか知らせており、学習場面で手紙を書くという設定では少し弱かったのではないかと考えられる。これはクッキーを作ってからこの授業まで1日あいたためであると考えている。しかし、家庭からの手紙の中に差出人の顔写真をはっておいたことは、児童が家族からの質問事項を個々に理解していく上でかなり有効であった。そのことで、児童は「伝えたい。」ということよりも、「手紙を書きたい。」という気持ちが強くなり、学習に向かう意欲は喚起されていたと考える。また、クッキー作りのVTRを提示することで、児童が自分の好きな活動を思い出し、VTRになかったことも交えて全体の場で発表することができたことも成果の一つであると考えている。

#### (2) 個の「めあて」(＝見通し：目標行動)に迫るものであったか。

児⑦⑪⑫については、VTRや写真を効果的に使うことにより、個々に自分の思いを「～したよ。」「〇〇君と～したよ。」というふうに全体の場で発表することができた。また児童の表現したものを文字化することで自分が言ったことを文字になっても弁別することができた。児⑨についても、VTRの中で本人が行っている活動を言語化することにより、「～しました。」と表現することができた。児⑧については、表現したものを黒板に板書していき、それを視写することができた。表現している内容は、「そして」「それから」といった接続詞を使ったものであったが、クッキー作りの状況をしっかりとイメージ化することができるようなことばかけが足りなかったため「〇が、～した。」という単文を接続詞でつなげただけに終わってしまったことは今後の課題である。児⑩については、自分のことばでクッキー作りのことを文字で表現した。本児については、この学習の中では、「クッキー」「〇〇君」(本児の名前)「～しました。」ということばは、断片的に書けていたので、「〇〇君が、～しました。」という文型を準備していたのだが、本児が書きたいことと異なる表現方法である可能性があったので、あえて提示しなかった。そのことで、助詞の使い方が誤っていたりしたが、自由に自分の思いを文章

に表現できたと考えている。

#### 4 おわりに

本実践では、児童の「めあて追究」について、国語の学習の中で表現していくことにはどのように指導者が支援していくかといったことについて考えてきた。児童が自分の思いや日々の活動での出来事を他者に表現していくとき、それが他者に過不足なく伝わったという実感をもつことが、児童の表現をより豊かにしていく原動力になることは確かである。また、児童が他者に伝えたいと思うような児童主体による印象的な体験をより多く設定し、学習に取り入れていくことが、児童の表現を幅広くすることにつながるであろう。さらに、出来事を想起させるような具体的な物を準備し、提示することでより一層児童のイメージが活性化されることになる。このような指導者の支援によって児童は学習の中で「～しよう。」というめあてをもつことができるようになるのではないか。

(注1)－引用文献 昭和60年度 研究紀要 「ことばを豊かにする教材・教具の開発と指導法の研究」より

(注2)－同 上

(注3)－同 上

(関 和典)